

## 埼玉県内全域におけるイヌ・ネコに関する寄生虫保有状況(2015年)

動物指導センター ○ 伊佐拓也 杉山 郁 新井陽子 根岸 努  
大澤浩一 中村眞幸  
衛生研究所 山本徳栄 近 真理奈 青木敦子  
国立感染症研究所 森嶋康之

### 【はじめに】

エキノコックス *Echinococcus multilocularis* をはじめとする動物由来感染症対策の観点から、埼玉県内におけるイヌおよびネコの寄生虫侵淫状況を調査したので、2015年の結果について報告する。

### 【検査材料および方法】

調査は2015年1月から11月までの期間に当センターに収容されたイヌ、ネコの糞便およびネコの血液を採取し、寄生虫検査を実施した。

糞便検査は直接薄層塗抹法、ホルマリン・エーテル法 (MGL法) およびシヨ糖遠心浮遊法を併用した。ネコの血清については、トキソチェック-MT (栄研) を用いてトキソプラズマの抗体価を測定した。

### 【結果および考察】

糞便検査はイヌ128検体、ネコ49検体について実施した。

イヌ全体における寄生虫の陽性率は、14.1% (18/128)であった。虫卵では、イヌ鞭虫卵が最も多く7.0% (9/128)、次いでイヌ鉤虫卵が5.5% (7/128)、イヌ回虫卵、マンソン裂頭条虫卵、瓜実条虫卵、日本海裂頭条虫卵が0.8% (1/128)であった(表1)。

一方、ネコ全体における寄生虫の陽性率は、49.0% (24/49)であった。ネコ回虫卵が最も多く18.4% (9/49)、次いでマンソン裂頭条虫卵が16.3% (8/49)、ネコ鉤虫卵が12.2% (6/36)、壺形吸虫卵が8.2% (4/49)、瓜実条虫卵が4.1% (2/49)であった(表2)。

原虫類では、成犬からは *Giardia* sp. が1検体 (0.8%)、*Isospora ohioensis* が2検体 (1.6%) 検出された。成猫からは、*Isospora rivolta* が1検体 (2.0%) 検出された(表3)。

次に、寄生虫類が複数感染していた個体は、イヌでは、鞭虫・鉤虫・瓜実状虫の3種の感染が1検体、2種の感染が3検体であった。ネコでは、回虫・鉤虫・壺形の3種の感染が1検体、回虫・マンソン・瓜実の3種の感染が1検体、2種の感染は5検体であった。

表1 イヌにおける糞便検査結果 (2015年)

	オス		メス	
	1歳未満 (n=1)	1歳以上 (n=74)	1歳未満 (n=0)	1歳以上 (n=53)
原虫類	0	2 (2.7%)	0	1 (1.9%)
回虫	0	1 (1.4%)	0	0 (0.0%)
鞭虫	0	4 (5.4%)	0	5 (9.4%)
鉤虫	0	4 (5.4%)	0	3 (5.7%)
マンソン裂頭条虫	0	1 (1.4%)	0	0 (0.0%)
瓜実条虫	0	1 (1.4%)	0	0 (0.0%)
日本海裂頭条虫	0	0 (0.0%)	0	1 (1.9%)
陽性頭数	0	10 (13.5%)	0	8 (15.1%)

表2 ネコにおける糞便検査結果（2015年）

	オス		メス	
	1歳未満 (n=4)	1歳以上 (n=13)	1歳未満 (n=7)	1歳以上 (n=25)
原虫類	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (4.0%)
回虫	1 (25.0%)	0 (0.0%)	5 (71.4%)	3 (12.0%)
鉤虫	0 (0.0%)	4 (30.8%)	1 (14.3%)	4 (16.0%)
マンソン裂頭条虫	0 (0.0%)	3 (23.1%)	0 (0.0%)	5 (20.0%)
瓜実条虫	0 (0.0%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)	3 (12.0%)
壺形吸虫	0 (0.0%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)	1 (4.0%)
陽性頭数	1 (25.0%)	7 (53.8%)	6 (85.7%)	10 (40.0%)

表3 糞便から検出された原虫類（2015年）

	成犬 (%)	幼犬 (%)	成猫 (%)	幼猫 (%)
<i>Giardia</i> sp.	1 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
<i>Isospora ohioensis</i>	2 (1.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
<i>Isospora rivolta</i>	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.0)	0 (0.0)

\*陽性率は、イヌの総数128検体、ネコの総数49検体をそれぞれ母数とした。

次に、ネコの血清におけるトキソプラズマ抗体価は、49検体のうち1検体（2.0%）が陽性であったが糞便中にオーシストは認められなかった。

さらに、捕獲または収容された住所地を旧支所と本所に分類し、県内各地域における寄生虫の陽性率を比較したところ、ネコにおいてのみ有意な地域差が認められた（Kruskal-Wallis test,  $P < 0.01$ ）（表4）。

表4 地域別にみたイヌ、ネコの寄生虫類の陽性率（2015年）

地域	イヌ		ネコ	
	検査数	陽性数 (%)	検査数	陽性数 (%)
県北部	64	12 (18.8)	38	23 (60.5)
県南部	18	0 (0.0)	1	1 (100)
県西部	17	4 (23.5)	10	0 (0.0)
県東部	29	2 (6.9)	—	—
合計	128	18 (14.1)	49	24 (49.0)

### 【おわりに】

本調査は、エキノコックスの埼玉県への侵入に関する積極的疫学調査の一環として実施しているが、依然として様々な寄生虫類の感染が明らかになった。特に、イヌやネコの回虫は、ヒトに重篤な幼虫移行症（トキシカラ症）を引き起こすことがある。これらの感染予防には、ペットの糞便の適正な処理及び手洗いの励行が重要である。

今後もこれらの調査を継続して、さらにデータを蓄積し、県民への動物由来感染症予防の普及、啓発に活用を予定している。